

平成31年度

一般入学試験A日程 学科試験問題

国語

1. 試験時間は、60分間です。
2. 問題は、この冊子の1～20ページにあります。解答用紙は別に2枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

植草学園短期大学

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えなさい。

《ある控えめな男のためにお祝いの会が開かれた。集まった人々は、ちよūdい機会とばかり、てんでに自慢をするやら、褒め合いをするやらで時間の経つのを忘れた。食事も終わろうという頃になって人々が気がついてみると——当の主人公を招くのを忘れていた。》

こういう話がチェーホフの『手帖』のなかに出てくる。主人公をそつちのけにして賑わった祝賀会の奇妙さ、理不尽さを描いたものだ。大きな転換期を迎えて、近年いよいよ明らかになってきているアキセイのさまざまな理論や学問と現実とのずれを見てみると、この話を思い出してしまう。

ただし、ここで厄介なのは、この《現実》というのが、直接に素手で掴めるように、どこかにころがつているものではないことである。だからこそ、その存在を浮かび上げさせ、できるだけ立ち入って捉えるためには、工夫を凝らす必要がある、いろいろな理論や方法が考え出されたのであった。たとえば、《事象そのものへ》をなよりのモットーにした《現象学》の方法が、イセイイチに練り上げられ、実践に際して細心の注意を必要とされるのは、そのいい例である。他方、肝心の《現実》の方はまことに控えめなので、いざとなってその不在がはつきりするまでは、その不在がわからない。そのこともこの話の主人公と同じである。

さて、そうしたさまざまな理論、学問、方法のなかでもっともパワフルで厚く人々に信頼されてきたのは、いうまでもなく《近代科学》である。近代科学というと、誰でもわかった気になる単純さがあるけれど、実は多くの要因から成る複雑な構成体である。その点はあとで詳しく述べることにして、いまは単純化して理解していただいていい。この近代科学ほど、人類の運命を大きく変えた人間の所産はほかに例がない。あまりにつよい説得力をもち、この二、三百年來文句なしに人間の役に立ってきたために、私たち人間は逆に、ほとんどそれを通さずに《現実》を見ることができなくなってしまったのである。

もつとも、《現実》とのずれが見やすく、次第にはつきり気づかれるようになったのは、自然科学そのものではなく、基本

的に自然科学をモデルにして科学性をめざしてきたさまざまな形態の社会諸科学であった。そのなかには、科学性を政治的にも旗印にして〈科学的社会主義〉を唱えたマルクス主義の社会理論も含まれている。マルクス主義の社会理論の場合には、ソヴィエトや東欧諸国のドラスティックな自由化のなだれ現象によって、^A現実への妥当性について答がはつきり出るという結果になったけれど、もっと地味なほかの社会諸科学の理論の場合にも、人々の心を捉えきれなくなってきたり、またなによりも、現実とのずれは否定しがたくなってきている。

(そのことを率直に認めて社会科学の再建をはかった貴重な企てとして、A・メルツチの『現在に生きる遊牧民』での考え方を取り入れた山之内靖の論文「システム社会の現代的位相」『思想』一九九一・六一七がある。そのなかで山之内は、人間の感覚は頼りがいがなく、理性によってこそ背後にある確実な構造が認識可能になるのだ、という一般的前提は変更を迫られ、それに代わって社会理論においても『身体的経験にもとづく認識に新たな意味が生じてくる』、と言いきっている。なお、精神分析医として社会活動もしたメルツチの理論中には、山之内も指摘しているように、私の〈臨床の知〉に通じる考え方がある。)

社会諸科学にくらべると、近代科学の中枢をなす自然科学の方は、現在でもまだ依然として有効性が大きいから、〈厳密科学〉(精密科学)としてのその有効な部分だけ見て、^B現実や人間経験とのずれの方を見ない人、見たがらない人が、まだ圧倒的に多い。しかし、近代科学の自然観が、自然をもっぱら人間のために役立たせる技術的開発の対象としてきたこと、したがって生態系つまりは地球環境の破壊をもたらすに至ったことはいまや明白であろう。また、高度に自然科学化し、技術化した近代医学が、たとえば集中治療室などに象徴されるように、医療の現場において、人間らしい患者の扱いからいよいよ遠ざかることになり、関係者だけでなく社会全体にウシンコクな反省を迫ってきていることも周知のとおりである。

では、一般的にいつて、近代科学が無視し、軽視し、果ては見えなくしてしまった〈現実〉あるいはリアリティとは、いったいなんだろうか。これもいまこの〈序文〉では、大ざっぱに言うておくしかないが、その一つは〈生命現象〉そのものであり、もう一つは対象との〈関係の相互性〉(あるいは相手との交流)である。この二つは互いに結びついているが、ここでは一応分けて扱っておこう。

あるいはひとは、生命現象だったら近代科学は十分扱ってきたではないか、と言うかもしれない。たとえば、分子生物学

やそれにもとづいた（ヒト・ゲノム）（人間の遺伝子）研究のような輝かしい成果があるのだから、と。けれども、操作主義の極致としての分子生物学が捉えているのは、原子論的に分子のレヴェルに還元された生命体の要素とその機械論的な組み合わせであって、生命現象そのものでも、生命現象の固有の、あるいは少なくとも特徴的な働きでもない。したがってそこでは、生命現象のもたらす意味の発生、自律的な振舞い、自己創造などが真つ向から扱われることがないのである。

なお、〈生命現象〉の重視に対して、「生命」の偶像崇拜」と名づけられた批判が、I・イリイチによってなされていることを私も知らないわけではない。それについては、のちに第I章第2節の終わりで論じることにする。

〈関係の相互性〉についても、現代物理学の量子論において、すでに、観測データは観測のための光や観測者の存在によって変化を被ることが着目されていること、ウィーナーに始まるサイバネティクス理論においてフィードバックというかたちで出力および入力エネルギーの相互性が問題にされていることなどから、その問題が自然科学のうちに取り込まれてきている、と言う人があるかもしれない。このような傾向は、エタイシヨウを拡張すると同時に方法そのものを問いなおす自然科学の展開としては注目に値するけれども、その方向と延長で扱われるのは、人間経験のなかでは限られた範囲での、関係の相互性にすぎない。

それにしても、^c近代科学がこれほどまでに人々に信頼され、説得力をもったのは、なにゆえであろうか。古今の数ある理論や学問のなかで特別の位置を占めたのは、なにゆえであろうか。その点についての議論も、のちに本論中で詳しく展開するが、あらかじめ私見の輪郭を披露しておこう。すなわちそれは、一口で言えば、近代科学が十七世紀の〈科学革命〉以後、〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉という、自分の説を論証して他人を説得するのにきわめて好都合な三つの性質をあわせて手に入れ、保持してきたからにはかならない。これらの三つの性質は、それまでの多くの理論にも個別的には見られたものの、互いに相容れず、両立できないと見なされていた。ところが、近代科学の誕生においてはじめて、それらは、結びつけられ、統一されることによって異例の力を発揮するようになったのである。

まず〈普遍性〉とは、理論の適用範囲がこの上なく広いことである。例外なしにいつ、どこにでも妥当するということである。だから、そのような性格をもった理論に対しては、例外を持ち出して反論することはできない。原理的に例外はないのだから。次に〈論理性〉とは、主張するところがきわめて明快に首尾一貫していることである。理論の構築に関し

ても用語の上でも、多義的な曖昧さを少しも含んでいないということである。したがって、そのような性格をもった理論に対しては、最初に論者によって選ばれた筋道によってしか、問題が立てられず、議論できないことになる。最後に〈客観性〉であるが、これは、或ることが誰でも認めざるをえない明白な事実としてそこに存在しているということである。個々人の感情や思いから独立して存在しているということである。だから、そのような性格をもった理論にとっては、物事の存在は主観によっては少しも左右されないということになる。

しかしながら、〈現実〉とは、このように近代科学によって捉えられたものだけに限られるのだろうか。というより、このような原理をそなえた理論によって具体的な現実が捉えられているだろうか。否であろう。むしろ、近代科学によって捉えられた現実とは、基本的には機械論的、力学的に選び取られ、整えられたものにすぎないのではなからうか。もしそうだとすれば、近代科学の〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉という三つの原理はそれぞれ、なにを軽視し、無視しているのだろうか。それらは、なにを排除することによって成立しえたのだろうか。そこでこんどは、そのことを考えてみる必要がある。

(中村雄二郎『臨床の知とは何か』より)

* 出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア～エのカタカナで示した語と同じ漢字を書くものを、それぞれ後の1～4の中から一つ選びなさい。

ア キセイ

- 1 キセイをそがれる
- 2 キセイを発する
- 3 お盆にキセイする
- 4 キセイ概念

イ セイチ

- 1 偉人のセイチを訪ねる
- 2 キリスト教のセイチ
- 3 セイチを極める
- 4 土盛りしてセイチする

ウ シンコク

- 1 確定シンコクをする
- 2 シンコクな事態におちいる
- 3 器物損壊罪はシンコク罪である
- 4 日本はかつてシンコクと自称した

エ タイショウ

- 1 攻撃のタイショウとなった
- 2 左右タイショウに作る
- 3 競技会でタイショウを獲得した
- 4 原文と訳文をタイショウする

問2 空欄に最も適する文を、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 集まった人々にあたるのは、常連のさまざまな華々しい〈現実〉であり、主人公にあたるのは理論や学問である。
- 2 集まった人々にあたるのは、常連のさまざまな華々しい理論や学問であり、主人公にあたるのは〈現実〉である。
- 3 控えめな男の祝いの会を主催した人にあたるのは〈現実〉であり、集まった人々にあたるのは理論や学問である。
- 4 控えめな男の祝いの会を主催した人にあたるのは理論や学問であり、集まった人々にあたるのは〈現実〉である。

問3 傍線部A「現実への妥当性について答がはつきり出るといふ結果になった」とありますが、どのような結果が出たと考えられますか。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 現実への妥当性が考慮された。
- 2 現実への妥当性が無視された。
- 3 現実への妥当性が肯定された。
- 4 現実への妥当性が否定された。

問4 傍線部B「現実や人間経験とのずれの方を見ない」とありますが、このことによつてどのようなことが起こりましたか。次のi・iiについて、それぞれ本文から二十五字以内で抜き出しなさい。

- i 自然科学の分野
- ii 近代医学の分野

問5 傍線部C「近代科学がこれほどまでに人々に信頼され、説得力をもったのは、なにゆえであろうか」とありますが、筆者が考える理由を説明した文として最も適するものを、次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- 1 〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉が結びつけられ統一されて異例の力を発揮したから。
- 2 〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉が互いに相容れずに両立できないとみなされたから。
- 3 〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉がそれぞれ他人を説得するのに好都合であったから。
- 4 〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉が理論や学問のなかで特別の位置を占めていたから。

問6 傍線部D「近代科学の〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉という三つの原理はそれぞれ、なにを軽視し、無視しているのだろうか。それらは、なにを排除することによって成立しえたのだろうか」とありますが、軽視・無視・排除されなかつたと考えられるものを、次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- 1 生命現象
- 2 現実や人間関係
- 3 明白な事実
- 4 関係の相互性

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜7）に答えなさい。

作家・井伏鱒二氏に、ファンレターを送った。上高地の絵葉書に、私のものなど読まない方がよいですよ、と記されて返事がきた。

私は、先生のご機嫌を損じたようである。そう感じた。あんな手紙、出さなければよかった、と悔いたが、あとの祭と
いうものである。

私は先生の文章の非を打ったのである。なんと大それた真似をしたものであろう。先生の誤字を指摘したのである。ファンレターといえるものではない。

先生のご返事をなんとしてもいただきたい、という下心があった。それで質問の形をとった。質問の内容がよくない。揚げ足取り、である。

なぜこんな手紙を書いたか。書く気になったか。実は伏線があった。

私は中学時代、いろんな新聞や雑誌に、作文や詩歌を投稿していた。ある時ひどくセンチメンタルな詩が入選し、雑誌の巻頭に掲載された。するとNという同年の女生徒から、ファンレターをもらった。それがきっかけで、Nとは以来ずっと文通を続けていた。彼女は大阪の名門私立高校に通っていた。手紙のやりとりだけで、会ったことはない。

そのNが、口ごもるような口調の手紙をよこし、あなたの文章は誤字が多く読みづらい、というのである。異性に注意されて、私は度を失った。こんな恥ずかしいことはなかった。顔から火がでる思いだった。

しかしNは優しくかった。自分にも間違いがあるはずだ。気づかずに独りよがりを書いていくかも知れない。今度お互い
に間違いを教えあいましょう。良い勉強になるはずだ。そう言って慰めてくれた。

Nのおかげで、私は慎重に文をつづるようになった。うる覚えの文字は、いちいち辞書に当って記した。私は『広辞苑』
を一ページから読んでいたくせに、言葉の意味を知ることには夢中で、文字の形を見るのを疎かにしていたのである。

勉強のつもりでNの手紙を読むと、Nにも誤字や当て字が結構あった。私が勇んでそれを正すと、ありがとう、恥ずかしいけど嬉しかった、遠慮なく注意してね、とすぐ返事がきた。

毎回のようにNのそれには、必ず一字か二字の誤りが見つかった。時に、同じ文字がくり返されたので、私はNの粗相と怠惰を叱責した。私の方では、ほとんど彼女の指摘を受けることはなくなっていた。あなたには負けました、私はまだまだ勉強が足りない、でも気をゆるめないうで監視しあいましょう、と返事がきた。

その返事にも、一字、誤字があった。ここに至って私はNの作意に気がついたのである。彼女は、さりげなく私を教育してくれていたのだ。

それはともかく、Nの提言以来、私は用字法に非常に細心になった。すると当然ながら、人の欠点が目につくようになった。

井伏鱒二氏の文章を書き写して、至るところに非を見つけたのも、そのようなノミ取りまなこの折だったのである。創元社刊の『井伏鱒二作品集』第四巻の収録作を槍玉に上げた。

さきごろ、この作品集を入手した。一冊ずつ、なつかしい思いでページをくついていた。第五巻をめくっていたら、一枚の紙片がはさまっている。いわゆる正誤表である。

何気なくのぞいて、アッ、と驚いた。正誤表は、第四巻についてのものだったからである。

「お詫び 前回配本いたしましたこの作品集の第四巻に、多くの誤植がございましたことは、御購読下さつてゐる皆様及び著者に対しまして誠に申し訳なく、謹んでお詫び申し上げますとともに、左の如く夫々訂正させていただきます。尚、三巻までの分にはこの様なことはなく、今後発売の分につきましては、特に校正を厳密に致します事を、併せてここに申し上げます。次第でございます。」との口上のあと、あるわあるわ、計四十六箇所もの誤りが正されている。

井伏氏が間違つたのではない。校正者が手を抜いたためのミスである。三巻までの分には誤植がない、というから、この巻に限って何事か手違いが生じたのであろう。それを知らずに、私は井伏氏を論難した。知らぬことはいえ、浅はかな所行であった。井伏氏は不快であつたらう。

正誤表をながめているうちに、私は思ひだした。

たとえば「丑寅爺さん」の小説で、「子供が学校で、ほかり子供から妙な目で見られるのが可哀さうだと云ふのである。」という文章があるが、「ほかり子供」の意味がわからない、と私は井伏氏にたずねたのである。

正誤表によれば、これは「ほかの子供」の間違いで、単純な誤植なのであった。

他に、「聚落第」とあるが、「聚楽第」が正しい表記ではないか、と私はDしたりげに書いた覚えがある。正誤表に、それもちゃんと出ている。

つまりこういうことだった。私がテキストに用いた古本の『井伏鱒二作品集』には、正誤表がついていなかったのである。一枚の紙きれであるから、本書の旧蔵者が粗末にしたのであろう。古本をテキストに使うと、こういう思わぬ落とし穴があるわけだ。

正誤表で思いだした。そのころ誤植のある本だけを集めている伊東さんという客がいた。

どうやってそういう本を見つけるのか、と聞くと、正誤表の有無で判断するしかない、と苦笑した。巻末についていたり、はさみこみのチラシである。しかしこれのついてる本は、よほど良心的で、多くは恥をおおやけにしたがらない、と語った。

伊東さんは校正を職としている方で、そうと聞けば誤植の本の収集も決してF奇矯ではない。

三十代のなかばであったか。一度遊びにおいで、と誘われた。月島の一丁目だったか二丁目だったか、裏通りの仕舞屋しもたやの二階に間借りしていた。

格子戸を開けると、老人夫婦が食事をしていて、二階にあがると、伊東さんも食事をしている。私は時分どきに訪ねたのではなかった。

「この家は昼食が十一時なのだよ」伊東さんが小声で言った。「年よりに合わせないと機嫌が悪いのだよ」とつけ加えた。賄い付きの下宿らしい。お菜は里芋の煮ころばしであった。伊東さんがなんだか偉く老けて見えた。部屋中、本だらけである。全部、誤植の本である。

三十代の女性があがってきて、茶を入れてくれた。階下の娘と名のつた。「嫁に行ったがうまくいかなかったらしい」と伊東さんが、女性が降りたあとと急いでささやいた。

その次に遊びに行ったら、伊東さんは階下に住んでいた。老夫婦と、住いを交換したという。「何しろ本が重くてね。二階がミシミシいうものだから」そうだろう、大層な量である。

そこに例の娘さんが出てきて、茶を入れてくれた。
「ワイフだ」と伊東さんが紹介したので、私はのけぞるほど驚いた。「娘さん」が引っこむと、伊東さんが腹が大きくなつたゼスチュアをした。

(出久根達郎『逢わばや見ばや』より)

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア〜エと意味が類似した言葉を選び、太字の部分を漢字で書きなさい。

- | | | | |
|-----------------|-------------------|----------------|----------------|
| | ア | | イ |
| | 1 イ ミブカク | | 1 ケ ツジヨ |
| | 2 ガ クシキブカク | | 2 カ シツ |
| | 3 ヨ ウジンブカク | | 3 フ ソク |
| | 4 エ ンリヨブカク | | 4 ケ イハク |
| ウ | | エ | |
| 1 ポ ウリヤク | | 1 ハイ ビ | |
| 2 イ ト | | 2 キ ヨウミ | |
| 3 イ ヨク | | 3 キ ヅカイ | |
| 4 シ タゴコロ | | 4 フ アン | |

問2 傍線部A「大それた真似」の文中における意味は何か。その言葉として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 大いに正論からずれた意見
- 2 大変よく似た感想
- 3 大家気取りの批評
- 4 大いに異なる指摘

問3 傍線部B「勇んで」とあるがなぜ勇んだのか。それを説明するのに最も適する切な言葉を、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 恥辱を受けた人にも誤字があり一矢を報いられると思って。
- 2 誤字を書くのは自分だけでないと自信を回復して。
- 3 誤字を見つけることに意味があると思えば使命感をもって。
- 4 発見が困難な誤字を見つけて達成感をもって。

問4 傍線部C「浅はかな所行であった」とあるがなぜそう思うのか。それを説明した言葉として最も適するものを、次の

1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 出し抜こうという浅慮から偉大な人を批判したから。
- 2 正当性を確かめもせず違法な行為をしたから。
- 3 しっかり判断もせず過剰の批判をしたから。
- 4 しっかり確かめもせず批判すべき相手を間違えたから。

問5 傍線部D「したりげに」とはどういう気持ちか。それを説明した文として最も適するものを、次の1～

4の中から一つ選びなさい。

- 1 得意な気持ちで。
- 2 困らせる気持ちで。
- 3 批判的な気持ちで。
- 4 教え諭す気持ちで。

問6 傍線部Eの「苦笑した」のはなぜか意味か。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 分かり切ったことを真面目に質問されたから。
- 2 正誤表の有無で判断するという自慢できる話でないから。
- 3 判断する基準が一つしかないという貧弱な話だから。
- 4 もっと深い根拠を説明したいのに出来なかったから。

問7 傍線部Fの「奇矯ではない」と判断する理由は何か。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 校正の研究のために誤植の本を収集する必要があるから。
- 2 誤植を許さぬ正義感から誤植の本に注目するのは正当だから。
- 3 校正職なので誤植の本に興味を持つのは理屈に合っているから。
- 4 その人の性格から考えて当然あり得ることだから。

第三問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜5）に答えなさい。

初めて筆を持ったのは、六歳だった。お稽古けいこことが上達すると言われる六歳の六月六日、私は生まれて初めて自分専用の毛筆を手に構えた。赤ちゃんの頃の私のア産毛うぶげで作った毛筆だった。

今でも、その日のことは鮮明に覚えている。

給食を食べて学校から帰ると、先代が新しい靴下を用意して待っていた。たった一か所、ふくらはぎの横にウサギのマークがあるだけの、何の変哲もないハイソックスだ。それに履き替えると、先代はおもむろに言った。

「鳩子、ここにお座り」

いつになく厳しい表情だった。

先代の指示の下、ちやぶ台の上を下敷きを広げ、半紙をのせ、文鎮で押さえた。その一連の作業を、先代の様子を真似ながら、自分だけの手で行う。目の前に、硯すずり、墨、筆、紙が、ちんまりとお行儀よく並んでいる。これが、文房四宝ぶんぼうしほうと呼ばれるものである。

先代の説明を聞きながら、私はじれったい気持ちを必死で押し殺した。イコウフンいこうふんしていたのか、その時はA足あしのしびれすら感じなかった。

いよいよ、墨を磨る時が来た。水滴から、硯すずりの陸おかに水を注ぐ。念願の、墨磨りである。私は内心、ひんやりとした墨の触り心地に、心をときめかせた。ずっと、やってみたかったのである。

それまで先代は、自分の道具には一切手を触れさせなかった。筆をおもちゃに脇の下をくすぐって遊んでいるのが見つかるものなら、すぐに蔵の中へと閉じ込められる。時には、食事を抜かれることすらあった。けれど、近づいてはいけなと言われれば言われるほど、近づきたい、手に触れたいという思いが募るのだ。

中でも、私の心を虜とりこにしたのが、墨だった。あの黒い塊かたまりを口に含んだらどんな味がするのだろう。きっと、チョコレートよりもキャンディーよりも、もっと素敵な味がするに違いない。私は、確信に満ちた気持ちでそう思った。先代が墨を磨っている時に流れてくる、あの仄ほかな何ともいえない秘密めいた香りがたまらなく好きだった。

だから、私にとって六歳の六月六日は、待ちに待った書道デビューの日だったのである。けれど、あれほど憧れた墨を手
にしているというのに、ちっとも上手に磨れず、先代からは容赦なく雷が落ちる。

陸で磨っては海に溜めていくという極めて簡単な動作が、六歳の私にはままならない。早く磨ろうと墨を斜めに持つと、
すぐに先代から手を叩かれた。墨を口に含んで味を確かめている余裕など、少しもなかった。

その日は、半紙に○ばかりをひたすら書かされた。平仮名の「の」を立て続けに書くように、延々、らせんを練習する。
先代に右手を支えてもらいなごらだといともたやすく書けるのに、私一人では、線があっちに行ったりこっちに行ったりと
迷子になるばかりで、太さもミミズになったり、蛇になったり、時にはおなかいっぱいのワニになったりと、全く安定しな
かった。

筆管を寝かせず、まっすぐに立てなさい。

肘を上げる。

よそ見をしない。

体は正面を向いたまま。

呼吸をしっかりと意識して。

すべてを同時にやろうとすればするほど、私の体は不安定に傾き、呼吸は乱れ、挙動不審になっていく。目の前の半紙に
広がるのは、どこまでもへなちよこな○だった。同じことの繰り返しに、だんだん飽きてもくる。なんといつても、当時の
私はまだ小学一年生なのだ。

結果、私にとって六歳の六月六日は、輝かしいお稽古始めの日にはならなかった。それでも私は先代の期待に応えよう
と、その後も必死に練習を繰り返した。

右回りのらせんが均等大きさで一息に書けるようになると、今度は左回りの○も、同じように練習する。

平日は、夕飯が済むと習字の時間だった。二年生までは一時間、四年生までは一時間半、六年生までは二時間、先代がつ
きつきりで指導するのである。

左回りのらせんなど、最初はどこを書いているかわからなくなったが、それも次第に、すらすらと同じ大きさと太さでバ

ランスよく書けるようになった。

平仮名は、曲線の連続である。先代はこのトレーニングこそが、美しい字をしたための基本中の基本であると考えていた。

努力が実り、私はやがて、目を閉じていても美しいらせんをすらすらと途切れることなく書けるようになった。

○の練習を卒業すると、今度は「いろはにはへと」の平仮名を、一字ずつ、完璧に書けるようになるまで特訓する。私は、自分なりのイメージをふくらませながら習得した。

「い」は、仲良しのお友達同士が野原に座り、向かい合って楽しくおしゃべりをしているように。

「ろ」は、湖の上に浮かぶユウガな白鳥の姿を。

「は」は、飛行機が滑走路に着地するように書き始め、その後は再び大空へ飛び立ち、空中でアクロバットのショーを展開する。

最初は先代が書いてくれたお手本を上からなぞって模写し、次にお手本を見ながら臨書し、最後はお手本を見なくても同じように書けるよう暗書する。先代から合格点がもらえたら、ようやく次の平仮名へと駒を進めることができた。

文字のひとつひとつに背景があり、成り立ちがある。それを理解するのは小学生の私にとっては難しい作業だったが、時には元になった漢字を知ること、それぞれの仮名のあるべき姿を形で覚えた。

この時にお手本としたのが、現存する最古の古今集の写本とされる『高野切第三種』である。美しいものを見ているだけでも上達すると言われ、私はこの本を絵本がわりに日がな一日眺めていた。

紀貫之が書いたとされる文字は、何が書かれているのか内容はさっぱり理解できなくても、なにやら妖しげで美しかった。私には、流れる文字のひとつひとつが、十二単を一枚ずつ脱いでいくように感じられたものである。

平仮名と片仮名で五十音がそれぞれ上手に書けるようになるまでに、およそ二年を費やしただろうか。私が本格的に漢字の練習に入ったのは、小学三年生の夏休みからだだった。

長い休みともなると、先代の熱意は更に上昇した。私は、友達とプールに行ったりかき氷を食べたりする暇もなかった。そのせいで、親友だと胸を張って呼べるような友人もできなかった。クラスでは、暗くて目立たない、影の薄い存在だった。

と思う。

漢字で最初に練習したのは「永」である。続いて、「春夏秋冬」や、「雨宮鳩子」という自分の名前が上手に書けるようになるまで練習を繰り返した。

字数の限られた平仮名や片仮名と違い、漢字には終わりがなかった。まるで、ゴールのないまま果てしなく続く旅である。しかも、楷書、行書、草書とある。それによっては筆順も変わってくるので、覚えることは尽きなかった。

こうして、小学生時代はひたすら習字の修練に明け暮れた。

振り返ると、その頃の私には、楽しかった思い出などひとつもない。一日休むと取り戻すのに三日かかると口酸っぱく言われていたため、林間学校や修学旅行にさえ筆ペンを持参し、先生の目を盗み盗み練習した。それが当たり前なのだと思じて、疑うことすら思いつかなかったのだ。

当時のことを思い出しながら、居住まいをただして墨を磨り始めた。

もう、硯から水がこぼれることもない。墨を寝かせて磨る癖も、なくなった。

墨を磨る作業には、エチンセイ効果があるというけれど、私は久しぶりに、意識が薄れていくような心地よい感覚を体全体で味わっていた。

眠くなるのではない。自分の意識が、どこか深く暗くて底のない場所へ、ゆっくりと後ろ向きに埋没していくのだ。あと一歩で、恍惚の境地に達しそうだった。

墨の濃さを確かめるため試し書きをしてから、郵便ハガキの表に宛名を書く。

相手の名前を間違わずに書くというのが、手紙の作法として真っ先に先代から教わったことである。

表書きは手紙の顔だと、先代は事あるごとに言っていた。だから、ことさら丁寧に美しく、わかりやすく書かなくてはならない。

相手の名前がハガキの中央に来るように一枚ずつ微妙に書く位置を調整しながら、それぞれの住所を書いていく。

先代は、美しい字には徹底してこだわり、死ぬまで精進を続けた人だ。けれどその一方、独りよがりになることは常に戒めていた。

いくら能筆だからってさ、誰も読めないような字で書いたんじゃ、粋を通り越して、D野暮つてもんだよ。

これが、先代の口癖だった。どんなに美しい字を書いても、それが相手に伝わらなくては意味がないというのである。だから、先代が草書体を練習することはあっても、実際に代書の仕事で用いることは、ほとんどなかった。

(小川 糸『ツバキ文具店』より)

※出題の都合上、原文の一部を改変してあります。

問1 傍線部ア～オの漢字はその読み方を平仮名で書き、片仮名は漢字に直しなさい。

ア 産毛 イ コウフン ウ ユウガ エ チンセイ オ 精進

問2 傍線部A「足のしびれすら感じなかった」理由として、最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 不安だったから
- 2 感極まっていたから
- 3 精根を尽くしていたから
- 4 怖かったから

問3 傍線部B「輝かしいお稽古始めの日にはならなかった」理由として、最も適さないものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 あれほど懂れていた墨を手に行っていると、ちっとも上手に磨れないから
- 2 同じことの繰り返しに、だんだん飽きてきたから
- 3 墨を口に含んで味を確かめるゆとりなど、少しもなかったから
- 4 先代の期待があまりにも大き過ぎたから

問4 傍線部C「疑う」ことがらとして具体的に何を指すか、文中から十六字で抜き出しなさい。

問5 傍線部D「野暮」について、本文ではどのような意味で使われていますか。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 独りよがり
- 2 分からず屋
- 3 がさつ
- 4 不器用